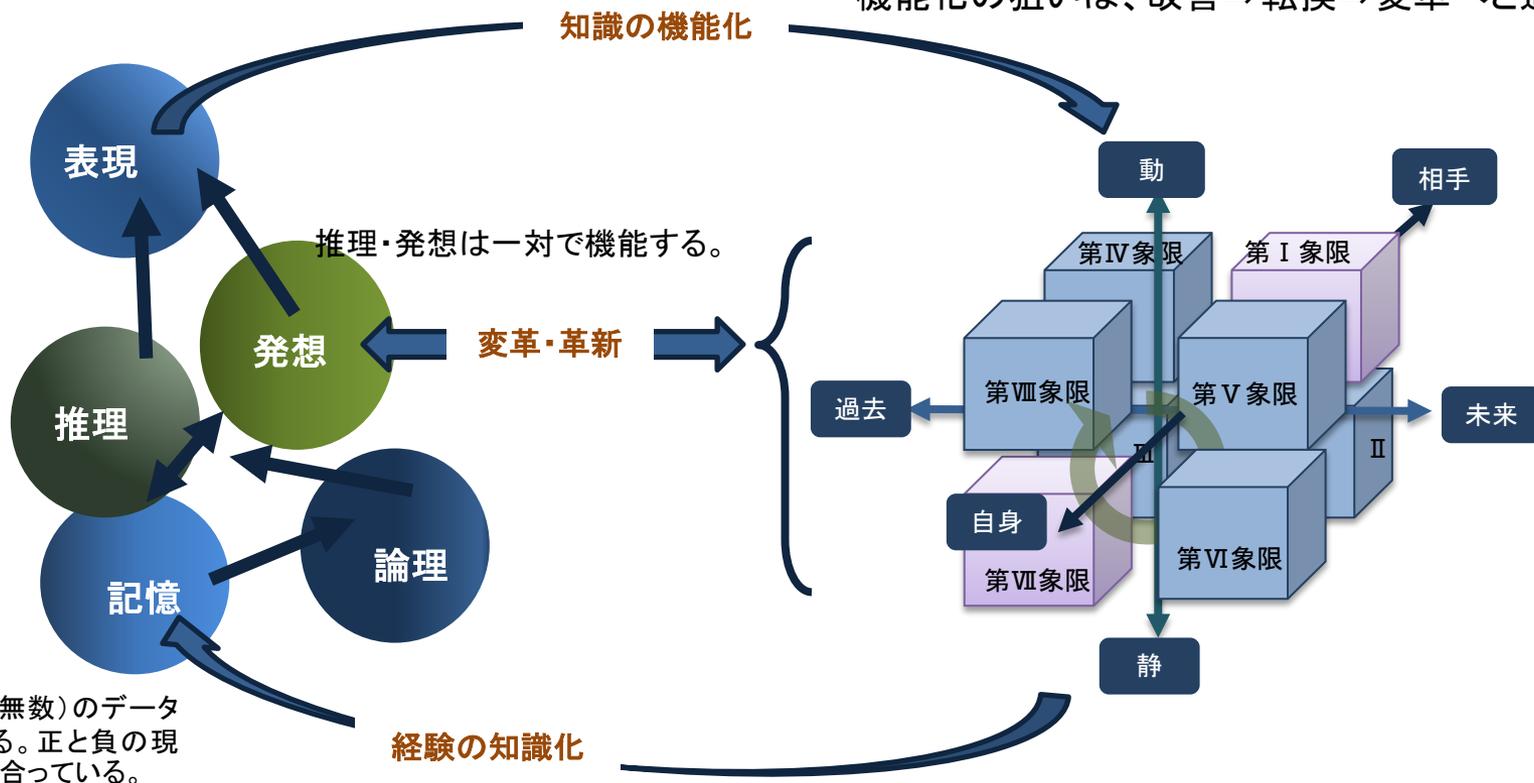


知識生成のサイクル

機能化の狙いは、改善⇒転換⇒変革へと進む。



記憶には、多量(無数)のデータが蓄積されている。正と負の現象と結果が重なり合っている。

《推理・発想》

- 知識の生成過程で、必然として、推理・発想が要求される場合と、目的設定によって課題として要求される場合がある。
- 推理・発想は解を解くためではなく、課題を機能化させるのを第一にとらえる。

《経験の知識化》

- 経験を分解、分析し、データ化し既存データとの関係性を導き出す。
- 分解時のカテゴリーを用意しておく。既存の知識体系と比較できるようにしておく。
- データから、原則に関わる場所、変動要素を区分する。

知識の範囲、知識の習熟レベル、人の立場、環境によって、上図の第I象限から第VIII象限のどれかに位置する。第I象限ですべてが動いているのがもっともよいが、状態によっては他の象限に位置するのが最適の時もある。思考と行動の環境と象限の位置によって結果が決まってくる。これらは、経験則として取り込まれていく。出来れば記録し続けるのが良い。実験として扱えば、記録は必然になり、知識体系化の材料になる。日常からデータ収集に馴染んでおく。